

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瓊瑠集	14
瑪瑙集	26
紅玉集	28
2月号月評	30
恵贈句集拝見 (43)	32
恵贈俳誌拝見 (14)	34
特別作品「緑のアイランドⅡ」	36
琥珀集作品鑑賞	38
瓊瑠集作品鑑賞Ⅰ	39
Ⅱ	40
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	41
俳誌交歓	43
「山の駅」共鳴句Ⅱ	44
「山の駅」を祝って	46
エッセイ 立冬のころ	47
他誌転載	48
皁の国父の蒼天 (35)	50
岩船・浄瑠璃寺吟行記	52

今月の一句

斑よき鹿かへり来ず花馬酔木

桂樟蹊子

(昭和二十二年作)

奈良の春日野の早春は馬酔木の花が馥郁と咲き誇っている。その花のほとりに立つ師が目の前の鹿の見事な毛並みと角にみとれてい
るうち、鹿は馬酔木の向こうへ去って行ったという。春の鹿の「ま
だら」は殊に美しい。早春の息吹を強く感じる句である。

隆子

ロシア唄

塩路隆子

冬風に殉教徒めく瀬戸の島
チヨーク音冴ゆる黒板一講目
着ぶくれを支へる己が脚を褒め
咳払ひに安堵の夜なべふたり住み
義士の日のかけ蕎麦思ひ切り熱く
雪原に湧く若人のロシア唄
梟に声かけてやる「さみしいか」

二月号光耀抄

塩路 隆子選

今宵より挑む腹筋柚子湯あと
椋鳥の黒き塊急旋回
気分セレブ冬の野菜のフルコース
豆炭の熾火しづかやエコライフ
初雪はちらほらがよし湖荒るる
鈍色の海静まりて佐渡冴ゆる
野地蔵に仕ふるごとく石路の花
堀越しの高みの熟柿怖れらる
訪ふ人も無し冬ざれの石切場
一番星早も輝く冬至前
鞆の祖母の厚き手柔らかき
口上の子供歌舞伎や冬うらら
「温活」の生姜ブームや冬の陣
駅長の点呼勤労感謝の日
渋柿剥く不慣れや夜半の風を聞き
オリオンに果てなき旅を誘はるる
にはか病み夫の手を借り寒椿

鈴木 照子
山口キミコ
森下 康子
石川かおり
小澤 菜美
川崎 利子
長濱 順子
北尾 章郎
伊藤 純子
竹内 悦子
笠井 清佑
田下 宮子
坂上 香菜
阪本 哲弘
坂根 宏子
桂 敦子
紀川 和子

紅葉濃き胸突き八丁奥の院
日の暮れてひと世の終る雪ばんば
花色を私らしく着重ねて
紅葉散る打たせの水の餅して
横書きに馴れぬ世代や賀状書く
深閑とキャンパス通り冬並木
渋柿を干して琥珀や自分作
堂々と踏ん張る銀杏風
錆びつきしクルスにも似て枯木かな
ゆりかもめ中州に集ひ日向ぼこ
夢殿へ道先案内雪ぼたる
観音の天衣軽やか小六月
赤きこと満ちたる自信ポインセチア
夫も亡く無い尽しクリスマス
放ちたる鷹の行方や笛高く
カーデイガン背中合はせに事務仕事
柿すだれあの二列目が美味さうな
仏教徒なれど臆せずクリスマス
もんぺ穿く妣の面影伊予緋
ロダン像この秋天を仰ぐべし

栗倉 昌子
中本 吉信
和田 森早苗
国包 澄子
大松 一枝
前川 ユキ子
増田 一代
三川 美代子
宮田 香
福本 すみ子
中川 すみ子
中村 ふく子
田中 浅子
辻 香秀
高谷 栄一
吉田 希望
宮崎 左智子
西田 史郎
藤見 佳楠子
伊東 和子

隼の空中ハント息を呑む
 炊飯に湧く肚力冬に入り
 メールには元氣装ひ炬燵守
 「月蝕よ」と子への送信冷ゆる夜
 枯尾花風に華やぐときもあり
 煮凝の燭に動きし目玉かな
 初霜や熊笹揺らすもの見えず
 節電の呼びかけに買ふ足温器
 瘦身の碧眼憎侶落葉搔く
 をどる子の指の先までクリスマス
 味含み輪切り大根煮上がりぬ
 帯塚へ彩を交へて紅葉散る
 朝もやに冬の鳶舞ふ松江城
 落葉音のみに鎮もる奥の院
 寒波来て草木おののく山野かな
 冬麗の光吸ひゐる池の鯉
 子の去にし乱れ籠より独楽の紐
 着水のさざ波美しきスワンかな
 ヒーターの温みしみじみ母のこと
 風荒きバス停に襟立てて待つ

井口 淳子
 杉本 綾
 能勢 栄子
 山崎 里美
 笹井 康夫
 塩路 五郎
 片岡久美子
 木戸 宏子
 小西 和子
 小林 久子
 飯田美千子
 五十嵐 勉
 池田加寿子
 伊藤 和子
 宇治 重郎
 大島みよし
 岡 佳代子
 大越 義雄
 和田 郁子
 山田 愛子

兎の弾む声に膨らむ初日かな
 敵味方供養の塔や草枯るる
 宮廷の生活偲べり秋の奈良
 忘年会スカーフ粹に決まりけり
 蒲生野や気球ふはりと冬の空
 ふる里の味人の味大気澄む
 境内の石露しつとりを極めけり
 千本の紅葉に染まる巨刹かな
 峽の日を独り占めせる残り柿
 枯るるほど木蓮の葉の音乾き
 笠置山岩場に揺るる枯芒
 新ものを真十字に切り千枚漬
 枯すすき彼岸此岸へ風靡く
 小さき門凌ぎて馬酔木返り花
 諸焼かむその気にさせるよき日和
 大根焚ほくほく旨し湯気の中
 無人駅車窓撫でゆく冬紅葉
 凧のマジックショーや木のダンス
 老舗宿松茸づくし堪能す

山本 孝夫
 山本 丈夫
 横田 矩子
 松田とよ子
 松田 洋子
 宮越 久子
 秦 和子
 藤本 秀機
 中井登喜子
 中島幸代子
 難波 篤直
 西垣 順子
 西村 敏子
 田中 芳夫
 谷口 俊郎
 寺田 光香
 辻 知代子
 土井くみ子
 富田ヒナ江

琥珀集

国宝巡り

山口キミコ

播磨路の国宝巡る冬浅し

浄土寺の阿弥陀は冬日光背に

国宝の鐘の音冴ゆる鶴林寺

時雨来て駆け込む茶屋の団子かな

手際よき庭師や城の松手入

もみぢ葉を掃く庭守の実直さ

椋鳥の黒き塊急旋回

枯蠓螂

鈴木 照子

枯蠓螂武家門残る医院かな

鬼ごっこ風邪癒えし子が鬼にされ

今宵より挑む腹筋柚子湯あと

熱爛や赤き月蝕窓にして

立ち止まる人の負ひたる冬落暉

「明日といふ日が」を合唱の子等冬温し

聖夜劇ドキドキを撮るアップかな

ハチ公

森下 康子

気配りの子は八歳やおでん鍋

ハチ公の足跡たどる師走かな

子の砦でありし日遠しちゃんちゃんこ

気分セレブ冬の野菜のフルコース

スイーツの飾りのサンタ傾ぶきて

仰山お食べ籠のみかんの天こ盛

風呂吹に機嫌良き子と悪き子と

豆炭

しんがりに来たる大鷲北琵琶湖
枯菊を焚く残り香の淡きかな
竹林に銀の光や冬の月
ひとときの膝ふれあひし焼鳥屋
漆黒の静寂広がる冬の湖
豆炭の熾火しづかやエコライフ
今年また献立ばかり日記果つ

石川かおり

一葉忌

冬虹の紫勝ち神在し
佗助の白満ちてをり空の画布
群なして疇へ帰る冬鷗
嘴と足紅きが哀し百合鷗
冬樺並木の涯は天へ融け
初雪はちらほらが良し湖荒るる
一文字に悩む晩学一葉忌

奥入瀬

鈍色の海静まりて佐渡冴ゆる
米どころ田に白鳥の啄める
句碑に散る紅葉毘沙門沼に映え
時雨来て烟る山寺磴のぼる
木守柿に歴史の重み光堂
奥入瀬川おいらせにつづく木立や冬仕度
峠越え山の白さにななかまど

川崎 利子

小澤 菜美

湖北

頬被りの媼現はれ芋水車
両側に苔の石垣紅葉坂
菊香るうだつ町家の地藏坂
観音の大耳飾り秋麗ら
寺多き湖北山里秋しぐれ
秋高し神の棒は瘤抱へ
野地藏に仕ふるごとく石露の花

長濱 順子

初時雨

北尾 章郎

街師走

竹内 悦子

塀越しの高みの熟柿怖れらる

小道具屋の電話どれ鳴る小六月

冬の蚊の老人力か打たれざる

印付すテレビ番組日の短か

人もまた彷徨へるなり散紅葉

携帯傘ありて親しき初時雨

銀杏落葉蹴散らしてゆくブーツかな

冬紅葉

伊藤 純子

おん祭

笠井 清佑

訪ふ人も無し冬ざれの石切場

皇子の墓守る山門冬紅葉

花八手街道沿ひの大和棟

冬晴るる岩屋を前に吾小さき

十夜鉦寺三方を開け放ち

風邪の子を膝に絵本と折り紙と

あたふたと生きて師走を迎へけり

朗々の托鉢僧や年の暮

一番星早も輝く冬至前

山茶花や祖父の愛せし庭のまま

ビル風に倒されさうや街師走

恙無き年のでつせん返り花

山茶花の白が好きです潔癖家

都鳥琵琶湖ホールにかよひ来る

陸奥に歓喜贈らん年の暮

鞍の祖母の厚き手柔かき

冬枯野大極殿が夕日浴び

春日野に禰宜の道あり落葉踏む

香具山や背を低くして山眠る

奴さんも震える道中おん祭

馬糞拾ふお役いろいろおん祭

島歌舞伎

田下 宮子

功罪

阪本 哲弘

口上の子供歌舞伎や冬うらら

冬の灯やホテルのびらの島歌舞伎

着膨れて老のおしゃべり凧の海 (島の老人ホーム)

老杉にのこる蛇巻じやまきや冬深く

冬凧の海を眼下に妣ねむる

文覚の籠りし洞や冬怒涛

神還り社家に伝はる隠岐神楽

生姜ブーム

坂上 香菜

烏瓜

坂根 宏子

「温活」の生姜ブームや冬の陣

匂ひまで悴みにけり薔薇の園

竹林に添水のひびき冬椿

せせらぎの川の流紋冬紅葉 (万博公園)

浜売りの生牡蠣買って宅急便 (室津)

孝書の万葉色紙冬座敷 (室津海駅館)

吊上げの二重戸くぐり冬ぬくし (室津民族館)

暮易し踏切に人滞り

瞽女往きし径は一筋雪しまく

功罪の自問自答や爛熱く

駅長の点呼勤労感謝の日

立ち上がる盲導犬の息白し

黒板に童を描きて冬休

懐手解きて送らむVサイン

軒下に吊るす柿揺れ農具小屋

渋柿剥く不慣れや夜半の風を聞き

越畑の一村囲む紅葉かな

進むほど霧の濃くなり地藏山

人影とまごふ地藏や冬の霧

「まっかだな」口遊みつつ烏瓜

水尾の里の黄昏れ柚子たわわ

瑠璃集

天龍

放ちたる鷹の行方や笛高く
補聴器に心音聞けり冬の夜
オリオンの恋の狩人煌けり
グルメラが集ひ祇園の年忘
天龍を墨に一筆賀状書く

高谷 栄一

カーデイガン

カーデイガン背中合はせに事務仕事
困や五行足らずの略年譜
裸婦像の耳に真珠やクリスマス
改札やゆき違ひける同ジャケツ
口論の末にカイロを投げにけり

吉田 希望

実万両

柿すだれあの二列目が美味さうな
七五三イダシ育男夫の子澤山
のんびりと冬日樂しむ地獄耳
山茶花の雨をふくみて咲きしふる
一粒を百両と見て実万両

宮崎左智子

寒椿

転居せる家に残され寒椿
忘れ得ぬ七十年巡る開戦忌
火吹竹に興味津々園児たち
白骨の如き木々抱き山眠る
仏教徒なれど臆せずクリスマス

西田 史郎

伊予緋

ゆくりなき焚火の馳走奥嵯峨野
もんぺ穿く妣の面影伊予緋
銀杏を踏みし迂闊やハイヒール
柚子風呂に今年の憂さを流しけり
「元氣です」の一言添へて賀状書く

藤見佳楠子

峡ぐらし

捨てた夢拾ふ氣にさせ冬銀河
明けやらぬ峡を出でゆく寒鴉
その度に迷ふ境ひ日落葉掃き
浜焚火潮さび声の大漁節
峡ぐらし冬日余さず使ひけり

松岡 和子

まつ赤なカーデイガン

隼の空中ハント息を呑む
唐橋の歴史の由来柳散る
ときめきのひと日まつ赤なカーデイガン
はかどらぬ書庫の整理や年詰る
結核のかくれ病舎や紅葉散る(ヴォーリーズ設計)

井口 淳子

古火鉢

郷愁の茶屋に据ゑたる古火鉢 (嵯峨野鳥居本)
縄張りを誇る山門冬装備 (天空の竹田城)
俳聖の息づく墓域紅葉散る (二乗寺の金福寺)
淡白な河豚でほっこり若狭宿 (敦賀)
瑠璃光を拝みし現つ秋うらら (瑠璃光院)

松田 和子

冬に入り

子の苞は郷愁そそる粟の菓子
花植ゑて秋の夜雨のありがたき
炊飯に湧く肚力冬に入り
胃にやさし冬瓜の味妣の味
ブラインドに洩るる冬日や美人女医

杉本 綾

方の神

ロダン像この秋天を仰ぐべし
実南天彩る庭に方の神
一村は同じ姓なり茶の木咲き
生真面目に風に順ひ落葉掃
寒灯に筆柔らかきガラシヤの書

伊東 和子

鴟の声

紅白の葉牡丹庭を飾りけり
悩むこと年々増えて鴟の声
大根干す長き短き掛け並べ
霜の朝怠け心を一蹴し
メールには元氣装ひ炬燵守

能勢 栄子

二月月号月評

塩路 隆子

今宵より挑む腹筋柚子湯あと

鈴木 照子

桂樟蹊子の薫陶をうけられた実力者のお一人であり、俳句の骨法を十分に体得された方である。腹筋は医者への奨めによるもので、そのきっかけとして「柚子湯」にて充分に体を温められたその夜から腹筋を始められたようである。効果は靦面であろう。ちなみに作者は筆者よりも十年以上もお若い筈である。しかし無理をしないようにお続けいただきたい。「柚子湯」と「腹筋」を結びつけた妙は流石である。

椋鳥の黒き塊急旋回

山口キミコ

椋鳥は漂鳥の一種であり、越冬地と繁殖地を異にする鳥である。夏は山に近い林に棲み、冬は人里近くに集団で移動する。夕方になると騒がしく鳴きながら街路樹などを共同のねぐらとしている。多いところでは数千羽以上の大群になるようで、全く「黒き塊」のさまを呈するようである。その集団が急旋回をするともなれば見事であろう。いい瞬間を句にされた。小さい鳥ながら夕空を

集団で飛ぶさまは、勇壮である。

気分セレブ冬の野菜のフルコース 森下 康子

作者自身のお料理の上手さには定評がある。お料理番組を見て、美味しそうなものはすぐに作って見たくなるようである。研究熱心でもある。「冬野菜」で「気分セレブ」になれる「フルコース」とはさてどんなお料理なのだろうか。作者にとつては、そこが自分なりの新しい味、調理法を体得される学習の場になるのである。「気分セレブ」の措辞に作者の幸せそうな顔が浮かぶ。

豆炭の熾火しづかやエコライフ 石川かおり

若手を集めた「ひこばえ」句会を宮田香さんと共にお世話願っている。豆炭は若い人達にはなじみが薄いと思っていたが、エコを呼びかける昨今豆炭が見直されているようである。豆炭は石炭・木炭・亜炭・コークスなどの粉末をまぜ、ふのり液などの接合剤で卵型に固めて乾燥したもので火持ちがよい。古くから火持ちの良さからコンロや炬燵によくつかわれたもので、このエコの時代に復活したようである。「熾火しづかや」の中七により、環境に配慮された平和な落ち着いた居間や茶の間が浮かび、懐かしさに打たれる。(以下略)